２０２２年（令和４年）冬号　No.34

日本ハリストス正教会教団　東日本主教々区宗務局

980-0021　仙台市青葉区中央 3-4-20
Tel (022)225-2744/Fax (022)224-3080
e-mail　orthodox@hyper.ocn.ne.jp

教会学校だより

播(ま)かれた種(たね)

The Eastern Diocese of the Orthodox Church in Japan

この降誕祭の夜は、全世界に平和をもたらしました。
だから、誰も脅してはなりません。
これは、最も穏やかな方の夜なのです――
誰も残酷にならないでください。
これは、謙遜な方の夜なのです――
誰も高慢にならないでください。

今は喜びの日――
復讐しないようにしましょう。
今は善意の日――
意地悪にならないようにしましょう。
この平和の日に――
怒りに支配されないようにしましょう。

今日、豊穣なる方は、私たちのために、ご自身を貧しくされました。
だから、富める者よ、貧しい者をあなたの食卓に招きなさい。
今日、私たちは、求めてもいなかった贈り物を受け取ります。
だから、私たちは、私たちに求める人々に施しをしましょう。

今この日、私たちの祈りに対して、天の扉が開かれます。
私たちの赦しを乞う人々に、私たちの扉を開きましょう。
今日、神聖なる存在が、私たちの人間性の印を自らの身に受けたのです。
人間性が、神の印によって飾られるために。

シリアの聖イサアク「降誕祭の説教」

若い世代の声　～人々を招く原動力になって～

上磯ハリストス正教会のある北斗市中野や清川、野崎と言われる地域は、教会の創立時から農業に携わる信徒世帯が多かった。時代を経てその形態も随分変わってきたが、複数世代で同居する家族は今も多い。そのため親から子へという信仰の継承は他の地域に比べるとよく出来ているが、この地域においても少子高齢化は進み、将来の教会の存続を危惧する声は上がっている。幸い、最近若い世代を中心に何かを始めなければと動き始めている。彼らの声に耳を傾け、励ましながら応援したいと考えている。

上磯正教会　アンゲリーナ 坂下 明日香

小さいころは、上磯正教会によく足を運び、遊び回っていた記憶がありますが、年を重ねていくにつれ、教会に行く機会が減っていきました。そんな私が、教会に再び行くきっかけとなったのは、「聖歌に興味がある、歌いたい」という気持ちでした。今では、上磯正教会の聖歌隊として、日々奮闘中です。

現在、上磯正教会は月に１回の巡回ですが、その日には聖歌練習があり、まだまだ歌える曲が少ない私にとっては、とても貴重な時間です。分からない所を集中して取り組んだり、慣れてきたらハーモニーを付けたりと、その時の状況に合わせて行っているので、自分自身の自信に繋がっています。それでも、テンポが分からなくなったり音程を間違えてしまったりすると、「自分はまだまだだな。もっと頑張ろう」と意気込んでいます。また、練習中はただ歌うだけではなく、時々雑談もしたりするので、聖歌隊の方とコミュニケーションを取りながら、毎回楽しく参加しています。

▲毎月行われている聖歌練習

今回、初めて北海道ブロックの聖歌研修会に参加しました。研修が始まる直前まで正直緊張していましたが、始まってしまうと緊張も薄れていき、それぞれの教会の歌い方を聞いたり、他の教会の方と一緒に歌うことで、自分の教会だけでは知りえなかった事がたくさん発見できました。晩祷・聖体礼儀と、普段は他の方が歌っている姿や所作などを見て勉強する機会があまりなかったので、とても勉強になった研修会でした。参加者の方もと

▲札幌正教会で行われた聖歌研修会

ても優しく、気兼ねなく接する事ができて嬉しかった事を今でも覚えています。

大人になってから、教会は堅苦しいイメージがありましたが、実際に来てみるとそんな雰囲気はなく、寧ろ歓迎されました。ですので「教会に興味がある。行ってみたい。」と些細なきっかけで良いので、教会に来てほしいと思います。来てくれた方の縁を大事にしながら、今以上に沢山の人が集まることを願っています。

上磯正教会　アンナ 山﨑 比奈子

上磯正教会では、今年度から正式に聖歌隊が発足された事もあり、聖歌や誦経に対する積極的な取り組みが展開されています。「聖歌に興味がある」「誦経に挑戦してみたい」と意欲を持ち、月に一度の巡回に顔を出す信者さんも増えたように思います。

田舎の地方教会では、「信者だけれど、作法の右も左もわからない」という声をよく耳にします。恥ずかしながら私もまだまだ分からないことばかりで日々勉強中です。そんな中、最近は聖歌や誦経等を通じて作法や教会のことを少しずつ知る機会が増え、そこに喜びや面白みを感じられています。新しく教会に足を運ばれた方から、「明日もまた教会に来たい」「もっと教会のことを知りたい」「自分にも何かできることがあれば教えて欲しい」という言葉を聞けた時は、胸がいっぱいになる想いでした。

聖歌に関しては、巡回日の土曜夕方から有志による練習が行われ、徹夜祷が定着し始めています。日曜の聖体礼儀後の聖歌練習では、一人一人の課題も明確になり、改善しようと皆が意欲的に取り組むことで聖歌隊全体の向上にもつながっています。

最近は、親・子・孫と三代にわたって誦経に取り組まれている姿もあり、当たり前のようで当たり前でないこのような状況が非常に喜ばしく、「受け継がれている」ということが目に見え、幸せに感じています。

子供の頃、教会に通い始めて言われた忘れられない言葉があります。「初めから分からないのは当たり前。何事もやってみたらいい。最初はまねっこでいいよ」。教会に足を運ぶことがハードルの高いことだと感じている方に、これから私が伝えていきたいと思う言葉でもあります。受け継ぎ、受け継がれ、教会のことを新しい世代に繋げて行くためにも、聖歌や誦経を通して、幅広い世代の皆様と同じ方を向きながら、一緒に穏やかに過ごして行けたらと今日も祈っています。

暗黒

司祭 ピーメン 松島 拓

皆さんは、「ダークマター」という言葉を聞いたことがありますか？

これは天文学や宇宙物理学で使われる用語ですが、「見えないし、それが何かも分からないけれど、確かにあると予想される物質」のことです。

それではなぜこんな妙な物質を「予想」しているのかというと、それは「銀河を構成する星々の質量の想定と、銀河全体の公転速度が釣り合わない」ためです。銀河全体の質量が想定通りだと、銀河の回転運動によって星々は飛び散ってしまうはずだが、現実にはそうはなっていない。となると、考えられるのは銀河が想定よりももっと重いということ。しかし観測される星々からはそんな質量は導き出せない。つまり宇宙には、観測できないけれども、確かに質量のある「何か」が存在しているはずだ。これを「暗黒物質／ダークマター」と名付けよう。と、このように科学者たちは考えたわけです。しかも計算してみると、宇宙全体に存在するダークマターは、私たちが観測できる物質のおよそ 5 倍も存在するという結果が出ました。私たちの宇宙は、想像以上に「未知の何か」で満たされていたのです。

その後研究が進み、「ダークエネルギー」という、これもやはり観測できない未知のエネルギーが計算によって導き出され、これを加えると私たちの知覚できる範囲は宇宙全体の5%程度にしか過ぎないということが分かってきました。優れた科学の目を通しても、私たちは宇宙の 5%しか知ることができていないのです。

さて、なぜこんな宇宙の話を教会の出版物でしたかと言うと、それは神がしばしば「真っ暗な深淵」に例えられるからです。

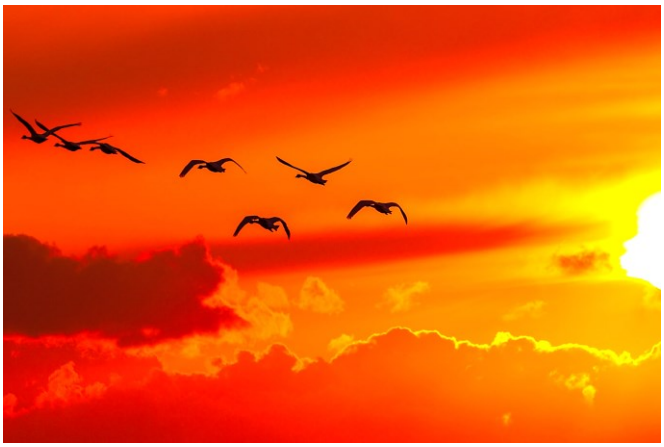
神が真っ暗闇だと言うと、一瞬不審に思うかもしれません。神は光ではないのか、と。

そうです、神は私たちを明るく照らし、私たちに正しい道を示す光です。しかし一方で、いくら目を凝らしてのぞき込んでもその底はおろか、何があるのかないのかも見えないし分からない暗闇のような存在でもあります。神を暗闇に例えるとき、それは邪悪さではなく、人間の知恵の及ぶべくもない無限に深く無限に大きい「何か」であることを示します。

数多くの神学者たちが神の知識を深めようと望み、そしてこの暗闇の前で立ちすくみました。物質的なこの世界のことさえ 5%しか分からない私たち人間が、神について知り得ることなど宇宙の砂粒一つよりもさらに少ないのです。

聖体礼儀の中で、司祭は「言い難く、知り難く、見る可からず、測る可からず、永く在り、恒に変わらざる神」と神を讃えます（「凱歌を歌い呼び叫びて言う」の直前）。私たちは「神はこういう方である」と表現することをやめて、もはや「私たちには分からないお方」として、讃美しているのです。

そうなると当然、「全然分からないものを拝むなんて不合理だ」という考えが出てくるかもしれません。しかし本当にそうでしょうか。私たちは宇宙の 5%しか分からなくても、地球上に住み、太陽の暖かい光を受け、星々の美しさに心を打たれます。分からなくても宇宙は私たちの生きる場だし、生命は宇宙のエネルギーに支えられているし、宇宙の謎に挑む科学者たちは、頭を掻きむしりながらこの「分からなさ」と格闘し、そしてその分からなさに打ちのめされても心地よい敗北感を味わっています。「宇宙ってすごいなぁ」と。そしてまた次の宇宙の謎に挑戦を始めるのです。



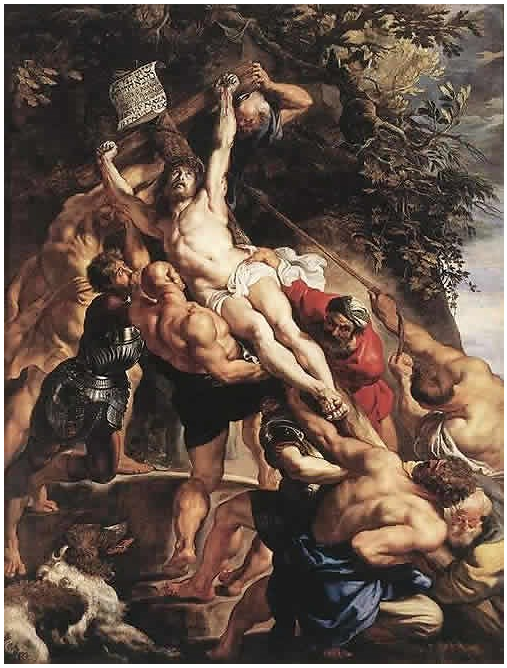
神についても同じです。私たちは神のことを全然理解できなくても、神は私たちに恵みを与えて下さるし、神みずからが備えて下さった祈りと交わりがあります。神学を学び深めようとする人々は、目の前に広がる深淵に、愛と畏れをもって身震いし、そしてそのことの内に喜びを感じます。

「分からない」ということは、「関係がない」「関わることができない」ということとイコールではありません。分からなくても関わることはできるし、関わることで「分からないということが分かる」こともあるでしょう。神は分からないお方です。それはどんな偉大な神学者にとってもそうです。しかしだからと言って、私たちと関わりのない方ではありません。宇宙のことが分からなくても太陽の光が暖かいように、神は私たちに暖かな恵みを降り注いでくださっているのですから。

（左）シナイの聖エカテリナ修道院にある「主の変容」のイコン。福音書に記されている通り、ハリストスは真の神として白く光り輝く姿で書かれているが、それとは対照的に、ハリストスの背後に在る楕円形（アーモンド形）の図像は、中心に向かうにつれて色が濃く、暗くなっており、これは神の深遠さ、測り難さを表している。この円をマンドーラと言う（マンドーラとは、イタリア語でアーモンドの意）。マンドーラは時空を超越した出来事を書く際に用いられる（他に「陰府降り」や「生神女就寝」等）。（左頁下）同じく変容のイコン（15 世紀後半、ノヴゴロド）。マンドーラは円形に書かれている。（上）「神現祭」のイコンから上部を抜粋した物。半円のマンドーラから父なる神を表す手が現れ、聖神を表す鳩が遣わされている。

「成し遂げられた」

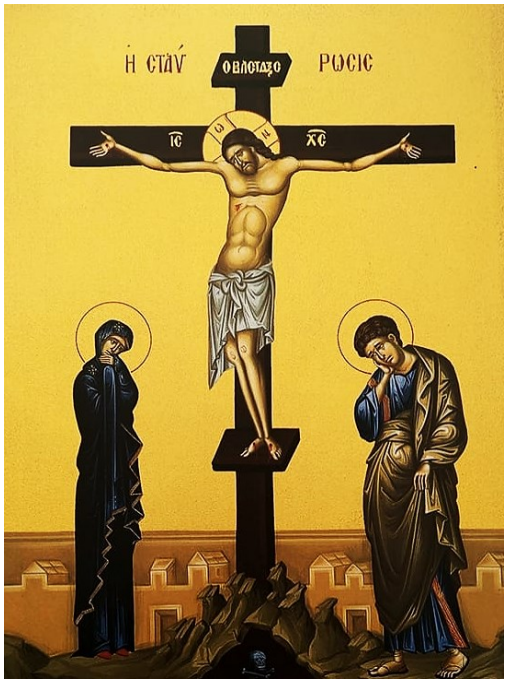
司祭 エフレム 後藤 悠太



私たち正教徒はイコンを前にお祈りします。イコンは私たちの祈りと分かちがたく結びついています。もしそこに祈りがなければ、イコンは意味を失ってしまいます。ですから、博物館で展示されているイコンは、厳密な意味では「死んだイコン」なのです。

さて、私たちにとってイコンがあまりになじみ深いものであるため、イコンの表現においては当たり前であることを、しばしば見逃してしまいます。例えばイコンは人物が中心に描かれるのが基本です。動物や植物のみが描かれていることはなく、風景のみが描かれていることはありません。

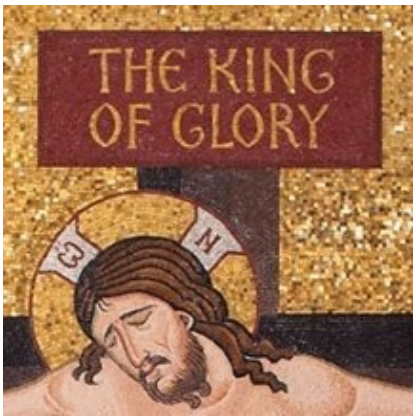
次にイコンに描かれたイイスス、生神女、聖人たちはどのような表情をしているかに注目してみてください。



上の絵画はルーベンスが描いた「キリスト昇架」(1610 年～1611 年)という作品です。死刑執行人たちが、イイススの十字架を立ち上げようとしている場面が描かれています。イイススの表情は苦しみに悶えており、私たちが直視することができないほどです。

次に正教会のイイススの十字架のイコンをご覧ください。イイススは苦痛に顔をゆがめた表情はしておられません。イイススが「成し遂げられた」(イオアン 19:30)とおっしゃってすでに息を引き取られた場面が描かれています。すべてが終えられた後です。このイコンにはルーベンスの絵画のようなダイナミックな動きはありません。感情の起伏は描かれず、人の心を情動的に動かす力もありません。しかしそこには永遠へと通じる静けさがあります。

イコンでは、笑い、悲しみ、怒り、苦痛といった特定の感情が描かれることはありません。タボル山で変容した時であっても、両替人を神殿から追い出した時であっても、ゲフシマニヤで祈られる時であっても、ゴルゴファの十字架の場面であっても、イコンで描かれるイイススの表情には静けさ、穏やかさがあります。ですから、十字架のイコンを見ても、私たちの中に悲しい、苦しい、といった感情が生まれる訳ではありません。むしろ私たちは「苦難の僕」(イサイヤ 53 章)であり、「十字架の死に至るまで従順であられた」(フィリッピ 2:8)イイススの中にさえ「栄光の王」の姿を見るのです。



現代の諸問題への対処　－エルピドフォロス大主教へのインタビューから－

司祭 ステファン 内田 圭一

ギリシャの新聞『タ・ネア』紙による、コンスタンチノープル総主教庁所属アメリカ大主教エルピドフォロス座下へのインタビュー記事が興味深かったので要約して紹介します。

エルピドフォロス座下はまず、「信仰の核心は、全ての人々との愛と連帯です」と明言し、いつの時代、どのような状況においても、教会は世界をどのように受け入れるのかという課題を負っており、これまで築いてきたものの中に安住するだけではいけない。新たな現実を受け入れることは決して簡単なことではないが、教会に受け継がれてきた精神の本質を見失わず、冷静に判断することが大切と述べられました。

新型コロナウイルス発生後、一本の聖匙を用いて信徒たちが領聖する従来の仕方に対して罹患への不安を訴える人々と、そのような考えは聖体への冒涜であると主張する人々との間で激しい対立が起こりました。エルピドフォロス座下は「感染への不安を持つ人にもご聖体は与えられなければならない」との信念のもと、「重要なのはハリストスの体と血そのものであり、それを領ける方法ではない」とし、一本の聖匙を全員に用いなくても良い、信徒が安心できる方法で領聖させるようにと指示しました。

今夏、エルピドフォロス座下はギリシャで同性カップルの養子に洗礼を授けました。進歩的な人々が性的少数者受け入れの姿勢を称賛する一方、保守的な人々は猛反発しました。座下は「神はすべての子供を愛しておられる。例外は無い」とし、洗礼の機密は誰に対しても開かれており、幼児を洗礼の恵みから遮断する理由など無い、と答えました。同性婚については、教会はこれまで守ってきた信仰と伝統を表明するとしながらも、「過去に目を向けるだけでは信仰を守ることはできない。医学、心理学といった科学の発展も尊重しなければなりません。」とし、「私たちは自分の信仰心や知識が完璧であると主張することはできません。」と述べています。

また、エルピドフォロス座下は2020年に起こった警察官による黒人殺害に抗議するデモ行進にリヤサを纏った聖職者の姿で参加し、「私たちはこの国の不公正に対して声を上げるべきです。人種、宗教、性別、民族の違いに関わらず、平和と正義と平等を守ろうとする人々と共に、この難局に立ち向かいたいと思います。」と述べていました。このインタビューでも座下は「宗教はその本質上、活動なのです。理論を振り回すのではなく、現実に対して応用し、実践しなくてはなりません。宗教指導者は信徒の模範となり、神と隣人を愛するという最も大切な戒めを実行しなければならない。」と答えています。

エルピドフォロス座下はこのインタビューで、他に中絶問題、戦争、難民問題、女性の権利などについて語っています。座下は一貫して、これらの問題は「信仰の欠如によって悪化する」としています。そしてその改善は「クリスチャンは神から託された全ての被造物に対して、特に全ての人々に対して責任を持つ者である」との自覚から始まること、なぜなら「神は、私たちの隣人の顔にご自身を顕しておられるから」だということです。

私たちクリスチャンにとって、社会問題を含め全てが信仰の問題である。科学は私たちが被造物の奇蹟、豊かさや多様性を発見するための神からの贈り物であり、信仰と矛盾するものではない。私たちはあらゆる被造物に対する神の無条件の愛に基づいて、この世で責任ある行動をするよう呼びかけられているのだとエルピドフォロス座下は教えています。

www.goarch.org/-/interview-with-ta-nea-gr-english-translation-archbishop-elpidophoros-2022 より

SF 寓話　**しあわせの薬**　　作：ダヴィド水口優明

「やあ、やっと完成したぞ。」
　マテリア博士は思わず大きな声をあげた。助手のマイザー氏は博士に走り寄った。
「おめでとうございます。博士の念願の薬ができあがったのですね。」
「そうだ、この薬を飲めば、すべての悲しみ、嘆き、心の痛みが融けて無くなるのだ。この世から悲しみが消えるなんて、こんなしあわせなことはないではないか。」
「博士、悲しみを持たない人などいないわけですから、この薬は飛ぶように売れるにちがいありません。博士は億万長者になれますよ。」
「なに、金儲けが目的ではない。全人類の救いが目的なんだ。人の心から悲しみや嘆きが無くなれば、この世に天国が訪れるだろう。」

　こうしてその「しあわせの薬」はまさしく飛ぶように売れた。安価で手に入る上、副作用もなく、人々はまるで栄養ドリンクのようにガブ飲みし、そしてこの薬に頼るようになった。
　さて、世の中はどうなったか…。博士の言うように天国のようなしあわせが訪れたのか―――

　いいや、世の中は混乱に陥った。無秩序になり、犯罪が増殖した。何故なら、人々は悲しみを感じられなくなり、何をしても心の痛みがすぐに消えるため、自分自身の罪、愚行、失敗について何も考えられなくなったのだ。博士の助手も、滝のようにお金が入ってくるのを喜びながら、ちょっとした困り事がある度に「しあわせの薬」に頼り、努力を忘れ、仕事をさぼり、自堕落な生活に溺れて行った。そうした現実を目の当たりにした博士は言った。
「ああ、私は間違っていた。私は何ということをしたのだろう。」
　涙を流しながら、その悲しみに耐えきれず、博士もその薬に手を伸ばそうとした。

　しかし、フッと心の中に「もしかしたらこの薬を飲もうとしない人物がどこかにいるのではないだろうか。その人に知恵を授かりたい」という思いがインスパイアした。博士は、必至になってそんな人物を探した。そして、とうとうその人を見つけて会いに行った。
　博士の話に耳を傾けたその黒くて長い衣を着た髭の男性は、博士に言った。
「あなたは天国をこの世に創りたかったのですね。確かに天国は『病も悲しみも嘆きも無い』ところです。しかし肝心なことをあなたは忘れています。それは人の心の中の『善』です。『善』を選び取る意志です。『善なる意志』を誰もがもっている状態が天国なのです。」
「ああ、そうなのですね。そうか、では今度は、その『善なる意志』をみんなが持てるような薬を開発する研究に取り組みます。」
「あなたはまた間違っている。物質の薬ではそんなことはできないのだよ。」
「では、どうしたらよいのでしょう。」
「私たちのしあわせのためには、『善』の根源である方とつながることが大切なのです。そしてそのためには『祈り』が必要です。『祈り』とは、単に『願い事をする』ことではなく、『心を天に向かわせる行為』です。そうした『祈り』こそ、物質ではない『しあわせの薬』と言えるでしょう。」